日本語教育に役立つ

文章論・文体論

編著者　張雲多

香港訊通出版社

ZC414X
1/1997

文章論·文体論

[illegible]

[illegible]

日本語教育に役立つ

文章論・文体論

編著者　張雲多

香港訊通出版社

日本語教育に役立つ　文章論・文体論
1997年4月10日　初版第1刷発行

編著者　張　雲　多
発行所　香港訊通出版社
香港九龍大角咀欅樹街80号6楼B座
TEL(852)3806521　FAX(852)3806804
印　刷　北京海澱区久利印刷工場
ISBN:962-521-082-2
定　価：20.5元（港幣）

本書刊行に当たり，国際交流研究所（大森和夫所長）の出版助成金を頂き，厚く御礼申し上げます。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

まえがき

振り返ってみると，本書の原稿は，十年も前の1987年の年末頃から書き始めたものです。さすがに時間の経つのが早いものだなと，感慨無量の感があります。また，本書が大阪府立大学教授樺島忠夫先生のご指導の賜物であり，ここでいま一度，先生に心から感謝致します。

1989年の年末，文章論・文体論に関する研修を終えて帰国した時，初歩的ではあるが原稿の骨組みがもう出来ていました。まだ熟したものとは言えないにもかかわらず，すぐ教材として大学院生の授業に利用しはじめました。

この間，学生たちと一緒に文章の研究に取り組んできたお陰で，文章という言語のまた一つの統一体への認識が一層深まりました。そこで，原稿は，何度も書き直され，だんだん充実なものになって来ました。

しかし，文章論・文体論という表題だが，文章研究の理論や方法などの紹介と応用に止まっている感じがないわけではありません。ただ，これでも日本語教育に役立つかも知れないと思うから，敢えて未熟な見解を述べて大方の卓説を引き出すつもり

で，これを公にしました。

そういうわけで，不備な点や誤った所があるが，ご指摘ご訂正をいただいたら幸いだと，もっと突っ込んだ研究を今後の課題として残しておきたいのです。

最後に，本書出版の際いろいろお世話になった中国日本語教学研究会胡振平会長に深く感謝の意を表します。

張　雲　多

１９９７年３月

目　次

1．文章研究はなぜ必要なのか……1
2．文章研究の歴史と現状について……10
3．授業に役立つ文章研究の観点……26
4．「連接関係」から見た文章構造……36
5．文章中の「は」と「が」について……50
6．「主語の連鎖」から見た文章構造……62
7．「文末表現」による文章考察……75
8．意図のあり方から文章構造を見る……86
9．品詞の比率と文章形態との関係……96
10．主題の表出から文章形式を見る……108
11．文章の冒頭と結尾について……119
12．文章構造上の「起・承・転・結」……132
13．指示語とその文脈展開上の役割……142
14．文章中の「会話描写」について……157
15．「風景描写」についての考察……167
16．文章の要点のとらえ方について……188
17．説明文の読み取り方を考える……176
18．論説文はどう読解すべきか……204

19. 小説とその読解方法について……217
20. 随筆の内容を読み取る仕方……229
21. 詩の鑑賞に関する知識……240
22. 短歌とその味わい方について……247
23. 俳句とその味わい方の基礎……269
参考文献……281

1．文章研究はなぜ必要なのか

文章研究の必要性をはっきりさせておかなければ，文章研究の重要性も分からないし，文章について何を研究したらいいのかと言うようなことも考えられない。言い換えれば，文章研究の必要性に関する考察は文章研究に入る前の下準備ではないかと考えたい。

文章研究の必要性については，日本の文章研究者のあいだに様々な考え方が存在している。文体論とか，文章論とか，表現論とか，文章作法論とか，文章の色々な側面を探究する分野が設定、研究されているのである。しかしながら，こうした一連の研究は，みな文章研究の必要性を認識した上で行われているのである。たとえば，文章研究を提唱して国語学界の文章研究に大きな影響を与えた時枝誠記は，『文章研究序説』の中で，文章研究の必要性について次のような見解を述べている。

「文章研究といへば，一般には，文章の作り方，組立て方，そして，文章の巧拙のやうな，文章の表現上の修辞・技巧の問題，換言すれば，文章の価値評価を論ずる学問のやうに考へられてゐる。従って，それは学問といふよりは，技術（art）に属するこ

とである。本書で文章研究といふのは，文章の価値技術を論ずるのではなく，文章といふものが，どのようなものであるかを，客観的に解明することを意味するのである。」

つまり，時枝誠記はその言語過程説に基づいて，言語的事実を語，文，文章というような，それ自身まとまりを形作っている三つの統一体に分けると共に，語論・文論に並んで文章論を文法学の一つの領域として設定したのである。彼の考えによれば，文章は文の集合であるとともに，それ自身まとまりをもっている一つの統一体であり，そのような統一体としての文章の性質構造を明らかにするのが文章研究であると言うのである。具体的に言えば，文章は極めて具体的な言語事実であり，文と言うものは文章から抽象されたものとしてしか考えられないのである。もし統一体としての文章の構造が，文と同じ物であるならば，特に文章研究という部門を設定する必要はないのである。しかし，実に文章には，文とは異なった別個の統一原理とでもいうべきものがちゃんと存在しているのである。だから，文章についての特別な研究が，我々の前に横たわっている重要な課題となったのである。文章研究の必要性は文章の特質によるものであり，この点をあまり考えないのは言語研究の一大欠陥と言わざるを得

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ないのである。

一方，文章が日本語研究の新しい対象となったのは，また言語の実践の立場，特に日本語教育の必要によるものであると考えられる。文章研究と日本語教育との関係について，時枝誠記はその『日本文法口語編』という本の中で，次のように述べている。「文章を対象として研究することは，一個の教材をそれ自身一つの統一体として取り扱わねばならない国語教育の方面から，現実の問題として強く要請されてゐることである。それは，国語教育の当面の問題は，語でもなく，また文でもなく，実に統一体としての文章（音声言語の場合も含めて）であるからである。国語教育に於いては，問題は文章の理解と表現との実践、訓練にあることは勿論であるが，そのやうな教育活動の根底に，文章学の確固たる裏付なくしては，その教育的指導を完全に果たすことが出来ない訳である。」

では，このような広い視野にたつ文章研究は，日本語教育にどのように貢献できるだろうか。永野賢の説に従えば，その一つは，教師の教材研究と指導計画作成のための有効な手段となるということである。それは，教師自身が明確な文章観を確立し，文章構造をがっちり押さえる能力を持って始めて学生に対して有効な指導を施すことが出来るから

である。その二つは，文法教育の改革への寄与である。旧来，日本の文法教育は主に単語の品詞分類や文の構造だけをその内容として幅は狭くて無味乾燥なものであった。文章研究の概念を導入してから，すべての問題を文章という視野において捉えることになり，文法学習の実用性と興味が一段と高まることは，まず間違いないのである。その三つは，文章研究の結果として，文章の読解指導・鑑賞指導と作文指導の助けとして利用され，そして間接に学生の理解能力と表現能力を養成し，根本的に日本語教育の水準を高めることになる。

要するに，文章の研究が日本の国語学者の間に盛んに行われているのは，文章というものの特質による理論的根拠のほかは，また日本語教育の実践的必要があるからである。例えば永野　賢が『文章論総説』の中で「大阿蘇」という作品の構造について次のように分析しており，その分析方法を吟味しながら我々の日本語教育の現状を反省するのが大変意義のあることだと思われる。

大　阿　蘇

三好達治

①雨の中に，馬がたってゐる

②一頭二頭仔馬をまじへた馬の群れが雨の中にた

ってゐる
③雨は蕭々と降ってゐる
④馬は草をたべてゐる
⑤尻尾も背中も鬣も　ぐっしょりと濡れそぼって
彼らは草をたべてゐる
⑥草をたべてゐる
⑦あるものはまた草もたべずに　きょとんとして
うなじを垂れてたってゐる
⑧雨はふってゐる　⑨蕭々と降ってゐる
⑩山は煙をあげてゐる
⑪中嶽の頂きから　うすら黄ろい　重っ苦しい噴
煙が濛々とあがってゐる
⑫空いちめんの雨雲と
やがてそれはけじめもなしにつづいてゐる
⑬馬は草をたべてゐる
⑭草千里浜のとある丘の
雨に洗はれた青草を　彼らは　いっしんにたべ
てゐる
⑮たべてゐる
⑯彼らはそこにみんな静かにたってゐる
⑰ぐっしょりと雨に濡れて　いつまでもひとつと
ころに　彼らは静かに集ってゐる
⑱もしも百年が　この一瞬の間にたったとしても
何の不思議もないだらう

⑲雨が降ってゐる　⑳雨が降ってゐる
(21)　雨は蕭々と降ってゐる

この詩のモチーフについて，色々な見解が発表されている。ある人は，

この詩の主題は「もしも百年が　この一瞬の間にたったとしても　なんの不思議もないだらう」の一行に凝集されている。時間と空間を超越した大自然の悠久感と茫漠感がここにたたみこまれてある。

と言う。また，ある人は，

広大な草千里浜，蕭々と降る雨，佇む馬の群，そこでは一瞬も百年もおなじことなのである。時は刻々と過ぎて行く。にもかかわらず自然においては時の経過は無いに等しい。

と言う。そのほか，さまざまな論があり，いろいろな見方や味わい方がある。しかし，永野　賢は，連接論，連鎖論と統括論の観点から，この文章（詩も文章である）を総括的に分析を行って，次のように述べている。

「この詩のモチーフは，大阿蘇の噴煙を背景とした草千里浜の大自然の中に立ち尽くして，蕭々と降り続ける雨に濡れそぼちつつ草を食べ続ける馬の群に見入っている詩人が，ふと時間の停止したような錯覚に襲われ，自然の広大さと時間の永遠さに深

い感動を覚えたことにある，と私はとらえる。」

ここで，この詩の「主語の連鎖」について，簡単に紹介しておきたい。普通，文章の構造を分析する時，よく文章中の各文の主語がどのように連鎖しているかを考察する。この詩の本文を見て分かるように，最初に出てきたのが，「馬が」と「馬の群が」というような「が」の付いた現象文的主語であり，「馬」が主役であることが明らかである。以下は「馬は」「彼らは」「あるものは」など「は」の付いた判断文的主語によって「馬」の様子を描いているのである。この「馬」という主役についての「が」と「は」の使用状態は第⑰文までであり，つまり第①から第⑰までは一つの段落になっているわけである。この段落の中で，先ず「が」で「馬」という主役を始めて前面に出して，それから「は」の付いた主語をもって「馬」について詳しく描写説明しているのである。その間には，また「噴煙が」という現象文的主語と，「雨は」「山は」「それは」などの判断文的主語が現れたが，それは，主役としての「馬」の背景となっている雨と山と噴煙の状況を描いているものであり，「馬」とは別次元のものであると言ってもよいのである。

この分析からも分かるように，文章中の「が」の付いた主語はとくに重要な意味内容を担っている

のである。第⑱文に突然に「百年が」という現象文的主語が現れたのが，文章の新しい展開を意味しているのである。つまり，ここで「百年が」で永遠の時を象徴的に強調し，「たったとしても」でそのことを題目として提示し，「何の不思議もない」という作者の感懐を導き出しているのである。これとは対照的に，第⑲⑳と(21)は，改めて視点を移すことにより，「雨が」の現象文にリードされた「雨」を主役として，「雨は」の判断文で蕭々と降る雨の様子を叙してしめくくっているわけである。つまり，この⑲⑳(21)は第一段落と首尾照応していると考えてもよいのである。これによって，第⑱に表されている内容はさらに効果的に強調されているのである。こうして見れば，第⑱は第二段落になり，第⑲⑳(21)は第三段落になったわけである。つまり，第①－⑰の第一段落の青草を食べ続ける馬と，第三段落（第⑲⑳(21)で構成）の蕭々と降る雨との中間に，時間が停止したかのような錯覚に陥った詩人の感懐（第二段落－第⑱で構成）を挿入することによって，この詩の文章としての統一が保たれているわけである。

近年来，我が国の日本語教育がめざましい発展ぶりをみせており，その実績はだれの目にもはっきり極まるものである。しかし，やはり更にその教育の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com